



## 2008年度(第4回) こども環境学会賞

ACE Prize Winners 2008

# 受賞者講演会

### 受賞者の紹介

論文・著作賞選考委員長：織田 正昭  
デザイン賞選考委員長：仙田 満  
活動賞選考委員長：小澤紀美子

4月26日(日)  
14:00～15:30

会場A：きぼーる  
ビジネス支援センター  
13階第2～3会議室

### 受賞者講演

#### こども環境論文・著作奨励賞

大澤 力(東京家政大学)、武藤英夫、木村美幸、西川久美  
「心を育てる環境教育①心を育てるリサイクル」、  
「心を育てる環境教育②地球がよるこぶ食の保育」

#### こども環境デザイン賞

牛山俊朗(ユープランニングアソシエイツ)、大野順義、酒井英一  
「手話による聾学校へのリノベーション『明晴学園』」

竹原義二(無有建築工房)、下山聡  
「あけぼの学園『南楓亭』」

荻野雅之(木楽舎)  
「楽つみ木広場ワークショップ～子どもたちの生きる力が発芽する『遊びと学びの環境作り』」

#### こども環境活動賞

佐々木香(ZEROキッズ)  
「こどものパワーで地域をつなぎ文化を創る！～ZEROキッズの15年」

玉田雅己(バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター)、米内山明宏、斉藤道雄  
「特区NPOろう学校『学校法人明晴学園』の設立に関わる活動～約75年間のろう者の夢！  
手話で教えるろう学校の実現に至る活動～」

# 2008年度(第4回)こども環境学会賞の発表

2009年3月23日

こども環境学会 会長	仙 田 満
デザイン賞選考委員長	
論文賞選考委員長	織 田 正 昭
活動賞選考委員長	小澤紀美子

2008年8月より公募致しましたこども環境学会の学会賞につきましては、2008年11月末までに論文賞4件、デザイン賞8件、活動賞7件、合計19件のご応募をいただきました。

こども環境学会内外の選考委員による厳正な審査の結果、論文賞奨励賞1件、デザイン賞3件、活動賞2件、活動奨励賞1件が選定されました。

受賞者および講評は以下の通りです(応募者の50音順)。

## こども環境論文・著作賞

論文・著作賞 該当なし

論文・著作奨励賞 大澤力(東京家政大学)、武藤英夫、木村美幸、西川久美  
「心を育てる環境教育①心を育てるリサイクル」  
「心を育てる環境教育②地球がよるこぶ食の保育」

## こども環境デザイン賞

デザイン賞 牛山俊朗(ユープランニングアソシエイツ)、大野順義、酒井英一  
「手話による聾学校へのリノベーション『明晴学園』」

デザイン賞 竹原義二(無有建築工房)、下山聡  
「あけぼの学園『南楓亭』」

デザイン賞 萩野雅之(木楽舎)  
「楽つみ木広場ワークショップ  
～子どもたちの生きる力が発芽する『遊びと学びの環境作り』」

## こども環境活動賞

活動賞 佐々木香(ZEROキッズ)  
「こどものパワーで地域をつなぎ文化を創る!～ZEROキッズの15年」

活動賞 玉田雅己(バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター)、米内山明宏、斉藤道雄  
「特区NPOろう学校『学校法人明晴学園』の設立に関わる活動  
～約75年間のろう者の夢!手話で教えるろう学校の実現に至る活動～」

活動奨励賞 山田晴子(ちばMDエコネット)  
「障害のある子とない子が共に学ぶ環境づくり活動 —ドキュメンタリー映画『ひなたぼっこ』製作と『ノーマライゼーション学校支援事業』の取り組み」

以上が受賞されたものですが、選考に漏れた方々におかれましても受賞者に劣らないすぐれた学術活動や実践活動であることを申し添えますとともに、さらに一層の活躍を祈念いたします。また更に多くの会員の皆様が次回の学会賞に応募されますことを期待いたします。

## 各賞の対象と審査委員

### (1) こども環境論文・著作賞

近年中に完成し発表された研究論文および著作出版物であって、こども環境学の進歩に寄与する優れたもの。

#### 選考委員

- 委員長 織田正昭（東京大学・国際保健／発達医科学）  
（委員） 飯島純夫（山梨大学医学部・公衆衛生／看護）  
（同） 清水将之（関西国際学・児童精神医学）  
（同） 住田正樹（放送大学・発達社会学）  
（同） 高橋勝（横浜国立大学・教育学）  
（同） 寺本潔（愛知教育大学・社会科教育）  
（同） 夏秋英房（聖徳大学・児童学）  
（同） 福岡孝純（帝京大学・スポーツ環境）  
（同） 矢田努（愛知産業大学・建築）

### (2) こども環境デザイン賞

近年中にデザインされた環境作品（建築・ランドスケープ・インテリア・遊具・家具・グラフィックその他）であり、こども環境学的見地からも高い水準が認められる独創的なもので、こどもの成育に資することが認められるすぐれた環境デザイン。

#### 選考委員

- 委員長 仙田満（東京工業大学名誉教授・環境建築学）  
（委員） 石井賢俊（NIDO インダストリアルデザイン・プロダクトデザイン）  
（同） 及部克人（武蔵野美術大学・グラフィックデザイン）  
（同） 木下勇（千葉大・まちづくり）  
（同） 定行まり子（日本女子大学・住居学）  
（同） 高山英男（子ども調査研究所・児童文化）  
（同） 松本直司（名古屋工業大学・建築学）  
（同） 福岡孝純（帝京大学・スポーツ環境）

### (3) こども環境活動賞

こども環境に寄与する、上記以外の活動（施設運営・行政施策・社会活動・その他）であって、近年中に完成した業績および継続的な活動によってその成果が認められた活動。

#### 選考委員

- 委員長 小澤紀美子（東海大学・環境教育）  
（委員） 井上美智子（大阪大谷大学・幼児教育）  
（同） 神谷明宏（聖徳大学・児童学）  
（同） 岸裕司（学校と地域の融合教育研究会）  
（同） 木下勇（千葉大学・まちづくり）  
（同） 木村歩美（幼児教育家）  
（同） 黒岩佐和子（児童支援活動）  
（同） 汐見稔幸（白梅学園大学・教育人間学）

## ＊ こども環境論文・著作賞

〈 総 評 〉 『論文・著作賞』はこども環境学および学会の学術的発展に寄与すると思われる公表論文または著作に与えられる。ここ数年の応募作品の流れとして論文というよりも著書が増え、今年度より『論文・著作賞』とまとめられた。今年度は応募が4点と少なく、これら全応募作品に対して数ヶ月間にわたり9名の審査委員全員が査読し、コメント付きで評価した。更に数回の審査会、欠席委員の再コメントを経て最終審査会にて受賞作を決定した。今年度は正賞該当はなく、奨励賞1点のみであった。奨励賞受賞の著書は子どものための環境教育に関するシリーズの2冊であり、一見、活動賞的なニュアンスの作品であるが、方法論的に工夫を凝らしたソフトな教科書として、論文著作賞にふさわしいと判断され受賞に至った。審査過程では本賞の位置づけ、論文と著書を同一分野で審査することの妥当性、活動賞との審査領域の境界などをめぐり議論あり、また例年よりも審査委員間の評価にばらつきが大きく、これらは今後の検討課題とした。当部門の審査評価法含めて広領域の作品の審査の難しさを改めて痛感した。(織田正昭)

〈 論文・著作賞 〉 該当者なし

〈 論文・著作奨励賞 〉 大澤 力(東京家政大学)、武藤英夫、木村美幸、西川久美

「心を育てる環境教育① 心を育てるリサイクル」

「心を育てる環境教育② 地球がよろこぶ食の保育」

大澤 力氏の編著による受賞作は、『心を育てるリサイクル』、『地球がよろこぶ食の保育』のシリーズの2冊である。子どものためのピオトープ研究はじめ幼児環境教育の大家の編著であり読みやすい。子どもの環境関連著書は多いなか、本著は身近な自然環境～地球環境にいたる様々な環境に対する環境教育の理論と実践を、豊富な写真や図、表などを用いて解説している。またCD、かるた、絵本、すごろくなど編集上の工夫が凝らされ読んでいて実にわかりやすく楽しい。表現こそ子ども向けであるものの、その内容は決して子ども向けにとどまらず、これから環境に興味をもって取り組もうとする大人や初心者にも役立つ。学者と現場活動者の協同による教育啓蒙書という従来型の枠を越え、編集スタッフをも巻き込んで書かれた本著は今後の子ども環境教育の表現の方向性の一つを示したものとしてこども環境学の発展に寄与しうるものと評価できる。今後自然環境のみならず、社会環境をも含めた総合的なこども環境を学ぶ著書が期待され、これが実現すれば正賞の資格も十分出てくるものと思われる。(織田 正昭)

## ＊ こども環境デザイン賞

〈 総 評 〉 こども環境学会デザイン賞はこどもの視点に立つ建築、造園、遊具、プロダクト、絵本、グラフィックス等さまざまなデザイン領域の総合的な評価より優秀なるデザイン作品を表彰するものである。第4回である本年度は8点の応募であった。こどもの想像力を育む積み木のデザインから、こどもの視点に立った保育園・幼稚園、児童養護施設、学校、病院など多様な施設のデザインが応募された。

第1段階の審査で現地審査作品5点を選定し、担当の審査員が現地審査やヒアリングを行い、最終的に本年のデザイン賞として3点、手話による聾学校へのリノベーション『明晴学園』、ユニークな建て替えを実施している保育園、あけぼの学園「南楓亭」と楽つみ木広場ワークショップを決定した。

本年もデザインレベルが高く、少数激戦となったが、良い作品を表彰することができたと思われる。こども環境学会デザイン賞は建築、ID、造園、スポーツ科学、こども文化等、専門領域の異なる審査員による多様な評価のもとに決められた。その点で受賞作品は多面的な高い評価が得られた作品といえる。受賞者の今後のますますの活躍を期待したい。また、応募者の皆様方のご努力に感謝し、再び本賞に挑戦していただきますようお願いしたい。

(仙田 満)

## 〈デザイン賞〉 牛山俊朗 (ユープランニングアソシエイツ)、大野順義、酒井英一 「手話による聾学校へのリノベーション『明晴学園』」

この作品は昭和58年開校の八潮小学校を改修して聾学校とするためにリニューアルデザインを行ったもので、明晴学園は日本初の手話を用いて授業を行う私立の聾学校で幼稚部と小学部がある。

ここでは設計者が、学習するための最適な空間について聾児たちと共同作業を繰り返し、その実証的なデザイン工程で獲得した適確な視点によって贅肉を切り落とし、重要な要素を機能的に配置して心地よくオープンな学びの空間を構築している。その設計理念と技術を高く評価したい。

聾児の情報伝達の武器は目である。私の心の奥まで読み取られているかと思えるほどに聾児はキチンと相手の目を見る。故にこの校内では見通しを実に良くしてある。教室と廊下との境には間仕切りがなく、視線を妨げずにテリトリーとしての落ち着きを得るための2本の太い円柱と子どもの成長に合わせて高さを変化できる木製の家具が置かれている。非常時に光が点滅する表示灯が要所要所にあり、手洗い前には大きな鏡を置き、広いトイレは明彩色の乾式素材にして子どもたちに安心感を与えている。床面まであるホワイトボードの壁には盛んに絵が書き込まれていた。また、廊下の天井までも子どもたちが製作した作品の展示空間としてある。このような視覚伝達の多様性を包含しつつ、シンプルな空間構成と白を基調とした色彩計画としたことによりこの学園で子どもたちの表情は輝き、自己表現は活性化している。この子どもたちにとって聾は障害ではない。

(石井賢俊)

## 〈デザイン賞〉 竹原義二 (無有建築工房)、下山 聡 「あけぼの学園『南楓亭』」

小さなお家のような園舎(南楓亭)を子どもたちがとても大切に使っている様子が印象的であった。吉野産檜の「合わせ柱」と集成材による「合わせ梁」を活用し、特別な大木によらず、開放的な空間を創出しているのは実にみごとである。その宝もののような空間は子どもたちの生活と遊びの場として機能している。住宅を想わせる空間は居心地の良さと安心感を与え、また、小さなスペースながらも、多様な空間が整えられ、子どもの活動を豊かなものにしていく。

本園の建て替えに先駆けて、子どもたちの居場所として建設されたこの園舎は、本園の建替えが終わると、1階の床と建具が撤去され、再び土の庭に還って、ピロティとなる。いわば仮設ともいえる空間が、これほどまでに子どもたちに愛されるのも驚きである。また、土に還っていくストーリーは新園舎に入ることのできない子どもたちにも、強い印象を与える。今後、子どもの施設の建て替えに、一石を投じる試みである。

遊ばせる空間ではなく、遊びを創造する空間であること、こどもに媚びるのではなく、こどもの感性に響く美しく心地の良い空間であること、子どもたちのオアシスになっていることなど、こども環境学会のデザイン賞にふさわしいと評価する。

(定行まり子、松本直司)

〈デザイン賞〉 荻野雅之 (木楽舎) 「楽つみ木広場ワークショップ  
～子どもたちの生きる力が発芽する『遊びと学びの環境作り』」

この積み木のデザインをしたのは、山梨県で木工家具をデザインする方である。積み木はヒノキの間伐材を使った、3cmを基本単位とした台形、立法体、長方形の3種類の形のみで、台形を加えることで開口部をもった「アーチ構造」ができることによって、空間的な造形を可能にしている。

また、数千個以上の大量のピースを、10～100人の子ども集団で遊ばせることによって、積み木遊びをダイナミックな遊びに発展させている。間伐材利用の環境教育的な意義もあり、幼児教育や学校教育の場で実践されているほか、入院児を対象とした「積み木療法」やダウン症児のワークショップなどにも応用されている。

この積み木を使ったワークショップは、「活動賞」にも通じるものがあるが、それを可能にしているのはこの積み木のすぐれたデザインである。 (仙田 満)

## ＊こども環境活動賞

〈総評〉 本部門は、子どものための環境づくりにかかわる研究論文の分野並びに子どものための諸施設のデザインの分野以外の、子どものための諸実践や諸活動を広く対象としている。今年度は7の団体からの応募がありました。各団体から活動の履歴とパワー満載の分厚い活動資料を3部お送りいただいた。事前に各審査委員が持ち回りでそれらの資料を読ませていただき、事前に評価点を付し、審査会議を開き公正かつ慎重に審査しました。

今回の応募の内容は、地域の文化を創る活動、手話による学校づくり、ピオトープづくり、子どもむけの造形創作、聴覚障害者への防災教育活動、障害のある子とない子が共に学ぶ環境づくり、ミュージカル活動を通しての子どもの居場所づくり活動と多彩な活動であるが、子どものもつ可能性を引き出し、表現し、地域づくりにもつなげ、大人も楽しみ、元気になっていくというものであった。また応募団体も地域の活動、個人のサークルの活動、NPO法人の活動などがあり、多彩な活動形態で、こども環境学会活動の広がりを示している。

今回、応募された7団体の活動は受賞に値する活動が多かったが、活動賞2団体、活動奨励賞1団体を選考した。惜しくも今回選考に漏れた団体、個人、グループは、次回以降にも応募していただければ受賞の機会はあるので、継続して活動を続け、応募していただきたい。受賞された団体、活動の選定理由については各団体への講評を参照していただきたい。 (小澤紀美子)

〈活動賞〉 佐々木香 (ZEROキッズ)  
「こどものパワーで地域をつなぎ文化を創る！～ZEROキッズの15年」

受賞者は、障害を持つ子どもたちの学校の教員を務める傍ら、学校外教育の実践を試し、子どもたちの自由な遊びのできる居場所を1983年に開設している。氏は「子どもたちと出会うというとき、大人は“ききみみ頭巾”をかぶり、遊んでいる子どもたちの動きや行為のおもしろさ、ふしぎさやあまのじゃく性に耳をすまさないといけない」と著書で述べているように、常に子ども中心主義の姿勢を貫き、自発

的な遊び創造の環境整備に努めている。ここには、横文字のワークショップなどというものが消し飛んでしまうような生活体験の場としての力強さに満ち溢れている。ここで子どもたちは遊びを通して、真の生きる力を育んでいることがこの著作からは窺う事ができる。氏とここに集う人々の今後の活躍に期待を込め拍手を送りたい。

(神谷明宏)

〈 活 動 賞 〉 **玉田雅己** (バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター)、**米内山明宏**、**斉藤道雄**  
「特区NPOろう学校『学校法人明晴学園』の設立に関わる活動  
～約75年間のろう者の夢！手話で教えるろう学校の実現に至る活動～」

日本のろう学校は、現在まで約75年間「聴者口話法」という教育方法が採用されており、ろう者の言語である「日本手話」での授業が行われてこなかった。欧米やアジアではバイリンガルろう教育が20年も前から実施されていたが、日本でのバイリンガルろう教育採用に対しては公的機関で取り入れることは難しいと長い間拒否されてきた。

そこで日本手話を第一言語、書記日本語を第二言語として身につけるバイリンガル、聴文化とろう文化を理解するバイカルチュラル教育の実践研究を重ね、困難を乗り越えて、構造改革特区の制度を活用して、さらに団地にある少子化で統廃合で廃校となる校舎を活用してろう学校設立に至っていることは驚嘆と賞賛に値する活動である。

自分たちの言葉「手話」で学ぶこと、すわなち手指動作と合わせて顔の表情や身体の動きが大事な役割を担う、日本語とは異なる文法や語彙を持つ言語であり、資料にみる子どもたちの表情は豊かである。子どものもつ可能性を発展させていく取り組みをろうの子ども自身の親自身が当事者として学校設立に関わり、廃校の新しい使い方や、運営の仕方など全国のモデルになる市民運動の事例としても高い評価を得た。

(小澤紀美子)

〈 活 動 奨 励 賞 〉 **山田晴子** (ちばMDエコネット)  
「障害のある子とない子が共に学ぶ環境づくり活動  
—ドキュメンタリー映画『ひなたぼっこ』製作と『ノーマライゼーション学校支援事業』の取り組み」

映画『ひなたぼっこ』は、障害のあるなしにかかわらずみんなと一緒に生きていくことの大事さを、押しつけではなく、とても自然に、からだに染み入る感覚で作っています。登場する「よっちゃん」が学童クラブで子どもたちと遊ぶ姿に、「あー、オレもあそこで一緒に遊びたいなあ！」と感じました。

この映画の誕生は、全国にいる「地域で共に学び、共に生きていきたい」という当然の願いをもつ人たちに大きな力を与えたと思います。本当に長い間粘り強く活動し、あのお堅い行政をついには動かし、障害のあるなしにかかわらず高校へ進学できる環境を創ったということに対し最大限の敬意を表したいと思います。また、発達につまずきのある子や障害のある子の進学や学校生活のサポート事業や公園清掃や「友幸農園」での取り組み、コミュニティーカフェ「ひなたぼっこ」の運営等、ちばMDエコネットの活動は、素晴らしい実践だと感じます。

ぜひ職場や仲間でのこの映画を観て、いろいろな事を感じ、そして議論しあってほしいと思います。

(木村歩美)

